

年頭に念う

(2009.1.6)



暗いニュースばかりが続いている。テレビを付ければ、自殺、倒産、派遣切り、経済破綻、政治の混乱、先行きの暗さばかりが報道されているが、こういう時こそ、足を大地にしっかり踏みしめ、胸を張り、顔を上げなければならない。

本園の「大地おどり」は正にこの姿を現している。「たくましく 大地に根を張れ、ふたばっ子」は、どんな逆境にあろうとも、うろたえることなく、しっかりと大地に根を張って、びくともせずたくましく育てて欲しいという願いを込めている。その願いを体現した舞が「大地おどり」である。人は、逆境にあったり、苦しくなったり、悲しい時、どうしても下を向きがちである。悲観的な話ばかりして、心をなえさせてしまう。逆に、そういう時こそ顔を上げ、遠くを見なければならない。エンカレッジするような話をして、勇気・希望に燃え、モラルを高めなければならない。

私は、どんな疲れもストレスも、子ども達と遊ぶと吹き飛んでしまう。幼稚園に行くと、子ども達がワッと飛びついてくる。一人一人をギュッと抱きしめると、何ともいえず癒されるのである。世の中がどんなに暗くても、子ども達の明るさ、あどけなさが暗雲を吹き飛ばしてくれる。子どもは希望であり、明るい未来である。私達は、子ども達の明るさに学ばなくてはならない。子ども達の未来を、暗くしてはならない。

暗く苦しい時こそ、今までのウミを出し、新しい社会を作りあげていくチャンスである。政治腐敗社会、格差社会から、みんなが持てる能力を十分発揮して、豊かで楽しい社会を作るスタートである。そして、子ども達をしっかりとした人間に育て、更により良い社会を作ってもらおう。



心が動くこと

(2009.2.2)

FEBRUARY 

暖かい冬の陽射しの中で、A君がブランコに座ったまま、空を見上げていた。私もA君の隣のブランコに座って空を見上げた。真っ青な空に雲が一つ、ゆったりと浮かんでいた。「雲っていいな。僕も雲に乗ってみたいな…」とつぶやいた。私はハッとした。しばらくのんびりと空を眺めることがなかった様な気がする。忙しいと、こんな心の動きもできない。忙しいとは、心を亡くすと書く。「園長先生も雲に乗ってみたいなー」と言った。のんびり青空の中を漂ってみたい、と心から思った。セカセカしていると青空がこんなに美しいこと、雲がこんなに柔らかく優しいことに気付かない。

秋の終わり、園庭に降る様に舞い落ちる落ち葉を見上げていたB君が、一本の常緑樹を指差しながら「みんな葉っぱがなくなっているのに、あの木はまだ葉っぱがいっぱいだ。どうしてだろう」と言った。すると、C君が、「あの木は寒くなくても元気なのかな。」すると、B君が「葉っぱがあった方が暖かいのに、葉っぱがなくなって木だけだと裸んぼで寒くなってしまふんじゃないかなー」と言った。そして、「園長先生、どうして葉っぱがある木と、なくなる木があるの？」と私に質問してきた。「木には常緑樹といって、冬でも葉っぱがある木と、冬になると葉を落としお休みする落葉樹があるんだけど、寒くなると葉っぱが凍りやすくなるから、葉を落として暖くなるまでお休みするのかな・・・」と考えながら答えた。

心に余裕がないと、こんなことにも気付かなくなってしまうし、子ども達の心の一瞬の動きにも気付かなくなってしまう。感動するとは心が動くこと、共感するとは心が共に動くこと。大人になると、すごい！あれ、何故、どうして？と感動したり、不思議に思う心を失ってしまう。子ども達を、部屋に閉じ込め暗記ばかり、ドリルばかりしていると、こうした心が失われてしまう気がする。もっと自然の中で、ゆったりとした時間を送らせたいものである。子ども達が、元々持っている知的好奇心を沸かせる体験の中で、知を働かせ、知を伸ばす環境を守っていきたい。



意欲を育てる

(2009.3.2)



最近気になることがある。「アア、お家に帰りたくないな」という子がいる。聞いてみると、家に帰ると毎日ドリルや〇〇をやらされるから、とのことであった。中には、殆ど毎日、塾やら習いごとに通っている子もいる。この時期になると、特に多くなることであるが、自分の子どもが遅れてしまうという不安、焦り、恐怖の中で、商魂たくましい塾や教材会社から、悪魔のささやきを繰り返されると、お母さん方は一層焦り、子どものお尻をたたいてしまう。

勉強することは、辛いこと、苦しいことという体験を、イヤという程積んでしまうと、いざ、親の手から離れて、自主的・主体的に勉強しなければならない時には、学習意欲を失っている。黙々とやっているから、集中してやっていると思っているが、やらないと叱られるから、黙々とドリルに向かってはいるが集中してはやっていない。イヤイヤでも仕方がないからやっているのでは、興味・関心・意欲（やる気）を育てられない。正確なデータがあるわけではないのですが、幼児期からガリガリ勉強を強制されている子は、小学校の三年生位までは、確かに成績が良いようである。しかしその後が続かなくなってしまう。

幼児は可能性のかたまり、人は生まれながらにして、自然に成長していく力と、同時に周囲の環境に対して、自分から能動的に働きかける力を持っている。又、幼児教育の目標は、幼稚園生活の中で、幼児に育つことが期待される、心情・意欲・態度を身につけることである。自然に成長していく力を持っている子どもの興味・関心を引き出し、必要な刺激を得られるような環境を整えて、意欲を育て、認め・励まし、学習する楽しさを体験することが大切である。

幼稚園でも、小学校入学前に、文字や数に興味・関心を持つようにしたり、小学校の授業時間に合わせ保育を組んだりして、小学校へのスムーズな連続性を図っている。勉強するなら、興味・関心を引き出し、楽しくやらなければ効果がない。しかも、短時間に集中してやる方が良い。まずは、目の前の成果ではなく、将来大きく飛躍するような意欲・心情・態度を育てていかなければならない。



一時が万事

(2009.4.10)



北竜台の幼稚園に着くと、すぐに事務のMさんが「先生、電話が入ってます」と声をかけてきた。「電話急げ！」などと、冗談を言いながら、事務室に駆け込んで電話を済ませ、玄関に戻ろうとすると、A君が脱ぎ散らかした私の靴を揃えてくれていた。私は、「あっ、しまった！」と思いながら、胸をつかれ、恥入った。A君に丁寧に礼を言った。

本園では、基本的な生活習慣には特に注意して指導している。今では、殆どの子が、きちんと靴を揃え、元気に挨拶ができる。(但し、あいさつは人見知り、恥ずかしがりやの子などがいるので、知らない人に対しては、積極的にできない子がいるが、表情を見ていると、声には出せないがあいさつをしようとしている姿は見える。)夏の「お泊り保育」の際、宿泊所の職員が、本園の子ども達の靴が整然と並んでいる様子を見て「こんなに綺麗に靴が並んでいるのは、気持ち良いですね。こんなこと初めてです」と驚いていた。

東京に用事があって、出かけた際、電車の中で私の隣に座った子どもが、泥靴のまま足を組んだり、足をブラブラさせて私のズボンに泥をつけたので「電車の中で足を組んだりしてはいけません」と注意した。すると若い母親は、謝罪するどころか、私をにらみつけた。「親が注意しなければならないですよ」と言うと、「子どもだからしょうがないでしょう」と返ってきた。「子どもだからこそ、人に迷惑にならないように、靴を脱がせるとか、人に泥を付けないように躡なければならないのですよ」と注意して嫌になってしまった。

考えてみると、若い人ばかりでなく、私達中高年も含めて、みんながおかしくなっている様な気がする。混雑しているのに席を詰めようとせず、大またで座っている人、車中で平気で食事したり、化粧したりしている人が多くなった。帰りのホームに、こんな広告があった。

座り方はその人を語る。座った時の足のカタチひとつで、その人となりは表れる。どんな人間か、足元を見られないためにも、もう一度足元を見直してみよう。

一時が万事というが、靴を揃える子は、物も大切にし、片付けもできるようになる。まずは私達が衿を正し、きちんと手本を示し、ひとつつつ、しっかりと「躡」をしたい。子ども達が「身」のこなしが「美」しい、素敵に大人になるように。



北竜台の桜

09.04.06撮影

二つの子ども観

(2009.5.01)



イタリアのレッジョ・エミリア市の幼児教育が注目されています。北イタリアの小さな町で、第二次世界大戦直後に、子ども達のための幼児学校を造ろうということが始まりです。戦争で、一番犠牲になるのは子ども達です。そして、子ども達を大切にできない社会には、未来がなくなります。未来を豊かにするには、まず子ども達を大切にしようとしたのが、レッジョ・エミリア市の幼児教育です。

レッジョ・エミリアの園の玄関には、次のような言葉が掲げられているそうです。「子ども達には平和に暮らす権利がある。平和に暮らすというのは、健康に暮らすこと、面白いものに囲まれて暮らすこと、友達を持つこと、飛ぶことを考えること、夢を見ること、子どもは知らなかったら間違える権利がある。何故かと言うと、問題と間違いが分かったら、その後、知ることができるから。」このことは、二つの重要な意味を問いかけています。一つは子ども観、保育観が問われています。日本では、まだまだ古い体質が残っていて、子どもは無知で無能だから、大人の意思で早くから鍛える必要があるという子ども観があります。保護者ばかりか、幼児施設の中にも、そういう考えがあります。レッジョの言葉の中では、子どもは大人と同じ権利の主体、一個の人格として尊重され、大人と共に未来を創造する共同体としての子ども観が示されています。

二つ目は、少々手前みそになりますが、ふたば文化幼稚園の教育理念が、とても似ていることです。「ふたば文化幼稚園は子ども達の楽園です。子ども達が主人公です。楽園であるからには、子ども達が楽しくなければなりません。そして、『たくましく 大地に根を張れ ふたばっ子』、子ども達が、心も体も健康に暮らし、人格形成の基礎づくりの幼児期にふさわしい生活（遊び）を大切にします。」中味はほとんどレッジョと同じです。

ふたばは、子ども達を遊ばせてばかりいる、と評されているようですが、私達は、まだまだ「遊ばせてばかり」と言われる程、子ども達の生活（遊び）を充実させていないと反省しています。子ども達の生活を守り、成長・発達を確かなものとしてとらえられるように、保育を充実させていきます。

子どもの楽園
レッジョ エミリア市



ペリー・プレススクール

(2009.6.01)



ペリー・プレススクールの事が、文科省の幼稚園の会議で話題になったという記事を目にした。私は二十年前に、私の幼稚園に勉強に来ていた筑波大の院生から、ペリー・プレススクールの資料をもらったことがある。当時はさほど話題にならなかったが、流石アメリカの研究者はすごい！と、その内容について衝撃を受けたことを覚えている。

就学前教育の経験の有無が、児童のその後の発達・成長のプロセスにおいて、どんな影響を受けているかを追跡調査したものである。その結果、就学前教育を受けることができなかった児童と、質の高い就学前教育を受けることができた児童との間に、その後の人生において、学歴・社会的地位・経済状況に大きな差が生じていることが明らかになっている。

ここで問題となる「質の高い就学前教育」は、個人の主体性を尊重した活動を中心にしたものである。決して教師が児童の前で一方向的に話し、児童がみんな黙って話を聞くというものではなく、主体性・自主性を尊重したものでなければならないとされている。

また、犯罪発生率・生活保護受給率にも大きな差が生じ、幼児教育の充実が社会の未来に大きな影響を及ぼすこと、幼児期の教育投資効果が如何に社会的に有効かを示している。紙面の関係で次回に続けさせていただきますが、豊かな環境と沢山の友達との関係の中で、遊びを中心とする、幼児期にふさわしい生活を通し、社会性、主体性、自主性を育て、体験を重ねるという幼児教育の基本が揺らいでいることと、子ども達への教育予算の削減を考えると、将来がとても不安になる。



良い保育が子どもの人生を変える

(2009.7.01)



多少重複するところがありますが、ペリープレスクールの続きを書きます。60年代、アメリカの同じ町に住む123人の子ども達を、保育を受けたグループと受けなかったグループの発達を27歳まで追跡調査、研究した結果、子どもの長期発達に及ぼした効果として、高等教育進学率・就業率・福祉受給率・逮捕歴に二倍近くの差がでました。国や市町村が、保育に投資する効果が、犯罪の減少、福祉費用の節約になること、又、所得の差、高等教育就学率等の差から、幼児期の保育にかかる費用対効果では、非常に有効なことが明らかになりました。

そこで、重要なのは保育の質です。乳幼児期に育つ大事な力として、知的発達の面より、感情・人間関係力・社会性に大きな違いが見られました。「幼稚園の時の逆上がりや雲梯に比べれば、どうってことないや！」という自信・意欲・対人関係・友人関係・遊び・生活の中での自己コントロール能力、言葉のやりとりの中での思考力等が、その後の能力を伸ばし生き方を決めていきます。いわゆるIQよりEQ（社会的能力）を、ということです。大人によって教えられて学ぶことより、日々の生活経験を通して、自ら学ぶことが重要です。幼児教育は「環境による教育」です。子ども達は、周囲の人的物的環境に主体的に関わり、体験を通して「学び」「育ち」ます。

先頃、お茶の水女子大とベネッセ教育研究センターが、共同で調査したところ、親をハッとさせるような結果が出ています。成績上位の子どもの親は、本をよく読み、子どもが小さい頃、絵本の読み聞かせをしているのに対し、成績下位の子どもの親が好むのはテレビのワイドショーで、殆ど毎日、子どもに「勉強しなさい！」と言っていることが多かったのです。最近「10歳の壁」が問題となっています。ドリルや暗記は一面で有効ですが、そればかりでは思考力・想像力（イマジネーション）が育たず、10歳までは何とかなっても、それ以上になるとパタッと止まって、ついていけない子が増えているのです。友達といっぱい遊ばせ、絵本を読み聞かせ、もっとじっくり、ゆったり子ども達を育てたいものです。



負の連鎖

(2009.9.01)



8月といえば、入道雲、澄みわたる青空、蝉しぐれ、かき氷、真っ黒になって遊び、ボールを追った日々を思う。夕食を済ませ風呂に入ると、すぐに泥のように眠りに落ち、早朝、母の包丁の音に目覚める、という生活であった。

今年は夏休み前に、子どもと遊びすぎて腰を痛めてしまい、寂しい思いをした。お盆を過ぎた頃、腰も治りかけたので、夕方、近くの公園に行くと、卒園児のA君が所在なさそうに、ブラブラと自転車に乗っていた。私に気付くと、近づいてきて、「何してるの?」と言った。「君の方こそ、何してるの?」と尋ねると「自転車に乗ってるの」。そんなこと分かっているのにと思いながら、「友達と遊ばないの?」と私。彼は「みんな毎日、塾や家で勉強しているから」と。「君は夏休みの宿題は終わったの?」と尋ねると、「宿題は終わった」と、「じゃー、みんなは宿題が終わってないんだ」と言うと「そうじゃなくて、宿題は後にして、毎日塾と家で勉強なんだ」と言う。

二度とない少年時代を奪われ、思い出を犠牲にして、何をしようとしているのであろうか。私は、今の子ども達が「可愛そう」と思った。私の時代にも、家庭教師や塾に追いやられている友達もいた。友との遊びも少なく、集団での草野球や悪戯も経験していない彼等は、小学校時代は成績は良かったが、中・高校の頃にはほとんどドロップアウトして、成績は上がらなかったように思う。

自由がなく、自主的に勉強したわけではないからである。自ら意欲的に勉強に取り組んでいたのではなく、強制されイヤイヤやっていたからである。イヤイヤやって苦しんでいると「勉強」って辛い、苦しい嫌なものであると心に染み付いてしまう。親の言うことを聞かなくなる中・高校生頃になると「親に言われた」からといっても、やらなくなる。そして、大人になって、あの時もっと勉強しておけば良かった、もっと習い事をしっかりやっていれば良かった、と考えるようになる。更に、学習塾の「あなたの子は、遅れてしまいますよ」という「魔のささやき」が加わり、再び我が子に塾とドリルを強制するようになる。

仕事でも、勉強でも、自主性・意欲がないと効果が上がらない。子ども達に良い環境の中で自由を与え、見守っていると、自主的に遊びに取り組み、どんなに苦しいことでも意欲的になる。自主性・意欲が育つと、自ら学ばなければならない時に、自主的・意欲的に学ぶようになり、効果を発揮する。幼少年期は、友と一緒にいっぱい遊ばせるのが良いのだ。



夏の思い出

(2009.10.01)



夏休みが終わる頃、この夏最高の気温を記録した日に、夏祭りがあった。炎天下で頭が痛くなり熱中症になりかけた。準備が整った頃、さすがに秋の気配を漂わせた風に、気温も下がり涼しくなった。園児が家族と一緒にやって来て、賑やかに夜店が開店した。そして、K先生の音頭で、子ども達の手作りみこしが繰り出し、続いてゲーム、盆踊りなど、とても楽しく祭りが進んだ。立ち続けだったので、さすがに疲れ、踊りの輪から離れてベンチに座って親子で踊っている様子を見てみると、とても楽しそうで、見ているこちら心もウキウキしてきた。

祭りの終わりに挨拶して台から降りると、ご家族の皆さんから、とても楽しかったと声を掛けられた。来春、1番下の子が卒園するAさんからも「先生、とても楽しかった。これでふたばの夏祭りも最後かと思うと何だか胸がいっぱいになって涙が止まらなくなりました」と言われた。私は、ついさっき、遅れてやって来たBさん一家を思い出した。Bさんのお子さんは、たった4ヶ月前に卒園していったのだが、懐かしそうに「園長先生、お手伝いに来ました。」と私を労わってくれた。私はAさんに、卒園しても来てくれたBさんのことを伝え、「ふたば文化幼稚園にいた子ども達は、いつまでたっても『ふたばっ子』です。卒園しても是非来て下さい」と言った。

こんな保護者の皆さんの温かい言葉に、私の心まで温かくなり帰路に着いた。農道を走っていくと、真っ暗な田圃道の遠くに、夏の終わりの花火が小さくパツ、パツと上がっていた。またしばらく行くと、小貝川の橋の上から花火が良く見えた。橋の畔に車を止めて、橋の中央まで駆け戻り花火を見つめた。シルエットとなった向こうの橋と木々の上に、パツと開いて川面に映ってはユラユラと消える花火に見とれながら思った。

数日前の新聞記事に、幼児虐待、特にネグレクトが増えていること、そして教育格差が広がっていること、それが幼児期にまで広がり、幼児期に受けたダメージは回復が難しいという。今しがた見た幼稚園の家族の楽しい光景とダブらせ、全ての子ども達の幸せを願わずにはいられなかった。明日はこの子達の将来に関わる選挙だ、耳ざわりの良いバラ蒔きに惑わされずに、そんなに大きな幸せを求めなくとも、子ども達みんなが、両親、家族、周囲の大人達に愛され、3度の食事をしっかり食べ、いっぱい遊んでぐっすり眠れる家庭と、平和な未来を守りたいと思った。2009.08.29



子どもと私の幸せ

(2009.11.02)



新生児が外界の刺激に対し、本能的に微笑することを新生児微笑という。しかし、最近は笑わなくなった赤ちゃんが増えているという。元々、外界に反応する能力を持っている赤ちゃんが、外からの刺激がない状態が続くと、外界からの刺激があっても、反応しなくなる。第二次大戦後のヨーロッパの孤児院で、知的障がい児や発達障がい児が急増したことを調査したところ、衣食住は十分に満たされていても、白いカーテンと壁に仕切られ、殆ど外部からの刺激、特に甘えや愛情の欲求が満たされなかつたりすると、障がいが生じることがあるという。これをホスピタリズム（施設病）という。子ども達は、刺激といってもテレビの機械音などではなく、周囲の大人や友達との言葉のやり取りの中で育っていく。幼児虐待、特にネグレクト（育児放棄）が増えていることと合わせて心が痛んだ。

こんな記事を読みながら、幼稚園の子ども達は幸せだなと思う。そして、私も幸せだと思いながら、こんな情景を思い出した。一学期の終業式の朝、門のところに立っていると、年少のA子ちゃんがお母さんと手をつないでやって来た。私に気付くと、パツと顔を明るくして「理事長先生だ！」と声を上げ立ち止まった。私が「おはよう」と声をかけると、うつむき加減になって、恥ずかしそうに小さな声で「おはようございます」と返してくれた。そして、お母さんの手を小さな両手でしっかり握って、何事か耳打ちした。二人が私のところに近づいてきて「家のA子は理事長先生が大好きで、家に帰って来ると、『理事長先生、今日も居なかった』と、寂しがっています」と言われた。私は胸がズキンとなり、申し訳ない思いと嬉しい気持ちと、ごちゃごちゃになり、うろたえてしまった。A子ちゃんは「今日は幼稚園に居てくれるの？私のクラスに遊びに来てくれる？」と、私は、恋人に愛を告白された時のように高揚して「勿論、行くよ！」と言った。保育の合間を見計らって、お魚の指人形を持ってクラスに行くと「本当に来てくれた」と目を輝かせて歓迎してくれた。指人形を使って、明日からの夏休みと海とお魚の話をして、最後に指人形の手品をした。子ども達は身じろぎもせず、話を聞き、手品に目を丸くした。そして、一人一人にギユウをした。その日は一日中、実に気分爽快であった。

11月号の園だよりの記述で誤解を生むような内容がありましたので、訂正してお詫びします。人間がとてもデリケートな存在であり、だれもが、いつ、どこでも、心や脳のバランスを崩すことがありうるのと同じように、障がいの原因は複雑であり、どんなに手厚く養護しても心や脳に障がいを負うことがあります。そしてほとんどが、親や周囲の人々には原因がありません。どんな家庭にも、どんな人にも起こる可能性があります。だから、社会全体でサポートしなければならないのです。幼児虐待、特にネグレクトが増加していること、そのことが子ども達を傷つけていることを訴えただけであり、障がい児＝愛情不足などという表現は全くありません。しかし、誤解を生むようなことがあったとすれば、そして、私の文章で傷つくような人があったとすれば、とても申し訳なく、私も深く傷ついています。言葉は重い、そして障がい児の問題は非常にデリケートであることを心にしっかりと刻みました。

心もあたたまる焼き芋の話し

(2009.12.01)



落葉が降り積もり、毎朝の掃き掃除が大変な季節になりました。絹幼稚園では、お母さん方がほうき持参で、清掃奉仕をしてくれています。できる限り広く、そして自然を残しておきたいと考え、雑木林を残しましたが、落葉の季節は苦労します。中には、木を切ってしまうえばスッキリすると言い出す人もいます。

真冬なみに冷え込んだ11月の末、リヤカーに山盛にした落葉を幾度も運んでいると、ホームクラスを利用している子が「理事長先生、この間はありがとう。焼き芋、とてもおいしかった。」と大きな声で言いました。お母さんと登園して来た子が、「エッ、いいなー、ホームクラスの子だけズルイ！」と口をとがらせました。実は、県民の日に、仕事をしに事務所に来ると、ホームクラスの子ども達がすでに来ていて、落葉を掃除していました。N先生に「焼き芋やってやろう」と声をかけ、焼き芋となり、とてもおいしくできました。それは「秘密」だったのですが・・・。と言うわけで、焼き芋会の再開となりました。大きな落葉の山からもくもくと煙りを出したかと思うと、パット火がついたりして、子ども達はたき火を囲み、大はしゃぎでした。「あったかい」と手をかざしながら、自然と「垣根のかき根の曲がりかど、たき火だ、たき火だ、落葉たき♪」と合唱になりました。なんと四番までしっかりと歌っていました。

そんな光景をみながら、10年前のU君のことを思い出しました。焼き芋が出来上がり、子ども達に少しずつ分けました。みんなホクホクの焼き芋を「アッチチ」と言いながら、一口食べると、「おいしい！」と歓声をあげました。U君も一口食べると「おいしい！」と言って、すぐにクラスの方に向かいました。私は咄嗟に、胸を打たれました。U君の心が分かったのです。私は、彼を追い、確かめるように、「U君、どうしたの？」と尋ねました。「とてもおいしいから、お母さんに持って帰るの」と言いました。私は「それなら、これは余った分だから」と私の焼き芋を彼に渡しました。彼はていねいに紙に包んでカバンの中にしまいました。

